

Title	山城国槇島城と真木嶋氏
Author	藤岡, 琢矢
Citation	市大日本史. 25 卷, p.117-121.
Issue Date	2022-05
ISSN	1348-4508
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学日本史学会
Description	

Placed on: Osaka City University

山城国檜島城と真木嶋氏

藤岡 琢 矢

はじめに

宇治市は京都と奈良を結ぶ街道上に位置し、宇治川の渡河点として、古来より交通の要衝として発展してきた。風光に恵まれていたこともあり、平安時代には貴族の別業の地として栄え、『源氏物語』における「宇治十帖」の主な舞台にもなり、平等院なども整備された。中世に入ると、祭礼神事に伴う芸能集団の活躍をはじめとした多彩な文化芸術が開き、盛んに演じられた田楽、猿楽は、中世以降も途絶えることなく地域に定着していった。宇治を代表する伝統産業の一つである宇治茶は、鎌倉時代には栽培が始まり、室町時代にはその名声は徐々に高まっていった。

二〇〇七年に宇治橋下流の宇治川右岸で太閤堤跡が発見され、二〇二一年には同地に新たに観光施設がオープンした。施設内の展示では豊臣秀吉による伏見城築城と太閤堤築堤が解説され、近世初頭に宇治で行われた一大事業が広く知られるところとなっている。

しかし、宇治川の先陣争いで知られる承久の乱から、太閤堤の築堤が行われた文禄三年（一五九四）の間、特に室町・戦国期の宇治については依然として不明な点が多く、関心を持つ人も少ないようである。

これについては史料的な制約が大きく影響している。

ところで宇治において、史料上で存在が確認できる戦国期城郭は檜島城のみであるが、同城に関する記述も多くない。しかし、檜島城主であった真木嶋氏が幕府奉公衆⁽¹⁾であったこと、元龜四年（一五七三）には織田信長と対立した將軍足利義昭が檜嶋城に籠っていることなどから、檜嶋城が重要な拠点であったことは間違いない。

そこで、本稿では、檜嶋城や真木嶋氏について現在確認できる史料・地理的様相などを改めて整理し、今後の研究に関する展望を示したい。

一 真木嶋氏について

宇治文庫 8 『宇治猿楽と離宮祭―宇治の芸能史―』⁽²⁾では、藤原兼仲の日記『勤仲記』の記事を根拠に、弘安年間（二二七八～二二八八）に光有・光康という人物がそれぞれ檜嶋長者、宇治長者として離宮社の神官を勤めていたとされている。離宮社とは、当時両社一体の神社であった宇治神社・宇治上神社のことで、平等院が建立されて以降はその鎮守社とされた。「光」を通字とすることから、この檜嶋長者を継ぐのが真木嶋氏であると推定されている。

真木嶋氏は、山城国の国衆の一人で、名前から宇治五ヶ庄内の檜島

名と関係が深かったものと考えられる。『後法興院記』応仁二年（一四六八）四月八日の記事には「是日平等院鎮守離宮祭也（中略）、神興三基、次社四人^{布衣}馬上、次^{社官}榎長者^{布衣}馬上、次^{社官}宇治長者^{布衣}馬上也」とある。社官として離宮祭に出席し、長者と呼ばれていたのが真木嶋氏であった。

真木嶋氏は在地の有力者であるだけでなく、將軍の直臣である幕府奉公衆でもあった。それを示す史料が『長享元年九月十二日常德院御動座當時在陣衆着到』である。ここでは將軍足利義尚が近江坂本に出陣した際に従軍した者の名前が書きあげられているが、その中の四番衆に「雍州真木嶋六郎藤原光通」がある。室町將軍と真木嶋氏との深いつながりはその後も続き、元龜四年（一五七三）の將軍足利義昭の二度目の挙兵時には、義昭は榎島城に入城している。

では、真木嶋氏の居城であり、義昭が立て籠もった榎島城とは、どのような城であったのだろうか。

二 榎島館から榎島城へ

榎島城は、もともと宇治川の中州にあたる榎島に位置していた平地城館であり、この地を本貫地とする国衆真木嶋氏の拠点であったと想定される。榎島の東には奈良街道が通っており、南には宇治の町が立地した。そして、西には巨椋池が広がっていた。山城国の南北を中継する水陸の要衝であったと言えるだろう。しかし、豊臣秀吉による伏見城築城に伴う宇治川流路付け替えや、明治時代の淀川改修工事、昭和八年（一九三三）から同一六年にかけて行われた巨椋池干拓事業などによってこの付近一帯の様子は大きく変化し、地形上、城跡はほとんどわからない。

現在、榎島城推定地に看板が立ち、少し北にある榎島公園に記念碑が建てられている。図1では、榎島城推定地および記念碑の立つ榎島公園の場所を示した。また、榎島城推定地の南西には藪場堤跡があり、図1に実線で示している。藪場堤の築造年は不明で、秀吉による築造とする説や、戦国時代の真木嶋昭光による築造とする説などがある。この堤は旧宇治川流路が形成した自然堤防を基盤に造られたため、ここが榎島城の南限にあたるかと考えてよいだろう。

『宇治市史2 中世の歴史と景観』⁴では、現在の微地形や地割、地籍図類に認められる条里地割などから図2のように宇治川流路と榎島城の位置を推定している。後述するように、十六世紀後半の榎島城には「外構」（惣構）が構築され、城下町も経営されたらしいことから、都市域の広がりをもっと広く推定する必要があるが、概ね図2のような地形であったと考えるべきだろう。

さて、管見の限り榎島城が史料上に初めて見えるのは、『大乘院寺社雑事記』文明元年（一四六九）十月二十六日の記事である。興福寺の成身院光宣が応仁・文明の乱に際し、東軍に加わるため、興福寺の衆徒や山城国人を率いて「宇治蒔嶋館」へ入っている。このとき、榎島城は山城国における東軍方の拠点として機能していたことがわかる。また、ほぼ同時期に真木嶋氏の動向が知られる。文明二年（一四七〇）七月、宇治周辺が戦乱の舞台となった際、東軍に味方した真木嶋氏は西軍に追われ、白川別所（宇治市白川）に逃れている。少し時代が下った明応四年（一四九五）には、畠山義豊被官の遊佐弥六が榎島に乱入したため、真木嶋氏は三室戸に退避している。

真木嶋氏は榎島城を拠点にしていたが、攻勢を受けると城を捨てて逃げていたようである。村落レベルの城では大規模な軍が迫ると降伏・

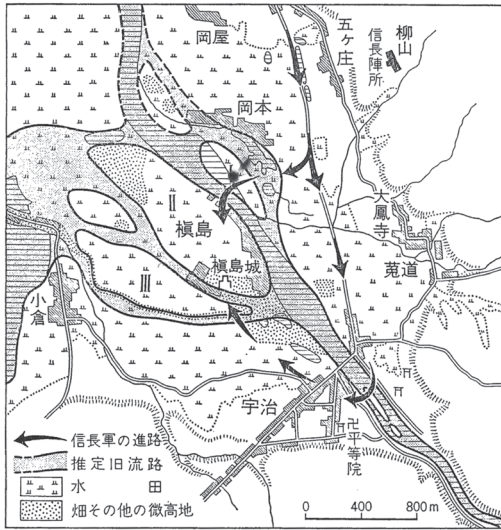


図2 宇治川流路と榎島城の推定地『宇治市史2』

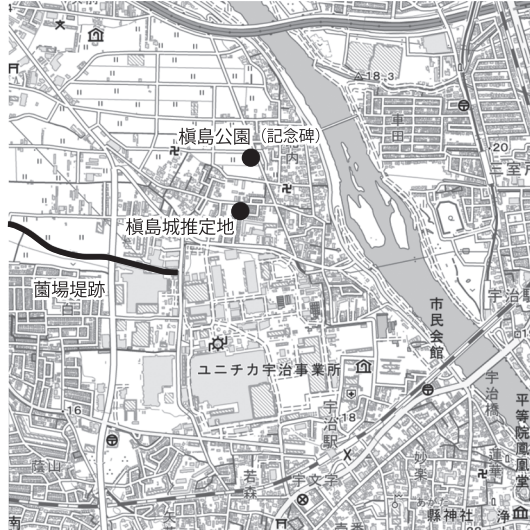


図1 榎島城推定地と記念碑の位置

逃亡するのが常であり、当時の榎島城は、籠城して抗戦できるほどの設備を持ち合わせていなかったと考えられる。

この次に榎島城が登場するのは、『後法興院記』明応八年（二四九九）九月二八日条である。細川政元と畠山尚順の対立に際して宇治・榎島あたりで合戦があり、「真木嶋館」が落城したことがわかる。

この時、真木嶋氏は尚順方に味方して敗北し、以降、榎島城は

細川氏が管理するところとなる。それまで国衆真木嶋氏の居館に過ぎなかった榎島城が細川氏の城となったことで、榎島城は大きな転換点をむかえた。

明応八年（一四九九）以降では、『後法興院記』文龜元年（一五〇一）六月一六日条に榎島城が登場する。細川政元が將軍足利義澄を「真木嶋城」に招いて酒宴を開き、金春大夫の猿樂が催されている。政元はこの年の越年を榎島城で行い、同二年に將軍義澄を招いて鷹狩りを行うなどしばしば榎島城を利用している。このことについて『宇治市史2』は、「大和・河内への拠点」としての重要性だけでなく、「榎嶋城の風光にひかれた」のではないかと述べている。榎島城は「落城時の荒廃を復旧する必要もあったし、あるいは規模も上げられていたかも知れない」としている。

明応八年の記事では「真木嶋館」とされていたのが、文龜元年の記事では「真木嶋城」となっている点が注目される。この違いのみで実際に変化があったと評価することはできないが、同じ『後法興院記』のなかで遷移している点に意味があるだろう。前述の『大乘院寺社雑事記』文明元年（一四六九）では「館」とされているが、文龜元年時点では城主が細川氏となり、將軍義澄を招くような施設となっていることなどからも、この間に榎島城の整備・拡充が進められた可能性が高い。『東寺百合文書』中にある五月二日付の「志賀定景書状」では、細川政元が被官の赤沢宗益を通じて、榎島城に用いる縄・竹・人夫などを東寺に催促している。この書状は年欠であるが、明応八年〜文龜年間（一五〇一〜一五〇四）頃に榎島城の修理をしたものと推定できる。榎島城は、細川氏に管理される公的な城郭となっていたのである。また、この書状において「榎島城」と表記されている点にも注意したい。

一方で、十六世紀になると槇島城に関する史料はほとんど見えなくなる。その原因は不明だが、十五世紀後半のように細川氏が主に管理・整備する城郭ではなくなったからかもしれない。再度、真木嶋氏の城館となっていたのではないか。但し、一定の規模と防備性は維持していたのだろう。

槇島城が歴史上、最も注目されるのは、元龜四年（一五七三）に織田信長と対立した將軍足利義昭が入城したことであろう。槇島城の防御施設について、義昭は「是れに過ぎたる御構へこれなし」と感心したという。信長による槇島攻めについては、『信長公記』に記されている。信長は宇治川を挟んだ対岸の「五ヶ庄之上やなき山」に陣取り、信長軍は平等院の門前と五ヶ庄のあたりから川を渡る（図2）。このとき一旦「中島」で休息したのち槇島へ攻め入り、「真木嶋外構乗破焼上攻られ」たため、義昭が降伏に至ったという。槇島城は、かつて「浼流たる横流」と謳われた激流・宇治川に囲まれ、「外構」（惣構）が設けられた堅固な城となっていた。「外構」の内側には「焼上」げられる建物群があったことも推察される。

三 槇島城と宇治

槇島城と宇治の町との関係性について言及しておきたい。

宇治神社・宇治上神社の神官として登場する真木嶋氏が槇嶋長者であるのに対して、「宇治長者」という人物が存在したが詳細は不明である。両社は古くから宇治郷・槇島の住民の信仰を集めていたが、近世には宇治上神社を離宮上社と呼んで槇島村東部地域の村人が、また宇治神社を離宮下社と呼んで、宇治郷の郷民が氏神として信仰していたという⁵。戦国期から両社が区別され、信仰されていたかどうかは定

かではないが、少なくとも両社は宇治・槇島の鎮守社として両地域から信仰を集め、神官は両地域の有力者が勤めていたことは確実である。京都と奈良をつなぐ交通の要衝である宇治には、防御施設の痕跡は確認されていない。『宇治市史』では、「恒常的な防御施設を営むにはあまりに重要な交通位置を占めており、城館を中心とするよりは、開放的な街路を中心とした町としての発展する方向を求めたもの」ではないかとしている。そもそも宇治には、室町・戦国時代、武家権力が支配者として直接関与したことを示す史料がほとんどない。

その意味で、細川氏が槇島城を公的な城郭として整備したことは注目される。戦国期には、地域支配権力が、以前から発達していた中世都市の近くに城郭を築き、そうした都市を「城下町」として活用する事例がしばしば見られる。

この観点からすれば、義昭が籠城した槇島城落城後の史料が注目される。

元龜四年（一五七三）の義昭追放後、信長は細川昭元を槇島城へ入部させたが、翌天正二年五月には塙直政を山城国守護に任じ、槇島城を本拠とさせた。同年十二月の「塙直政書状」によると、信長が宇治の上林氏に対して「諸商人荷物、陸地・河上通路并宿」の支配を「宇治・真木嶋」において申し付けており、宇治とならんで槇島が商業・流通活動の拠点になっていたことがわかる⁶。槇島城には城下町が造営されていたのだろう。これは真木嶋氏時代の延長であったが、信長の領国支配の一環として新たに整備された側面が大きいであろう。槇島を都市として、宇治と一体化させて発展させることをめざしていたのだろう。

この城下町の位置は、槇島城すぐ近くの藪場堤内側、あるいは南側

に川を渡ったもう一つの中州あたりであろうか。

むすびにかえて

その後、秀吉による伏見築城に伴って槇島城は廃城となったようである。太閤堤の築堤によって宇治川の流路が変わり、小倉堤上が新たに大和街道となったことで、交通の要衝としての宇治・槇島の地位は低下し、槇島城の拠点としての中心地性を低下させたのであろう。^⑦ 秀吉による伏見における築城と新城下町建設は、都市や地域社会を強制的に再編成するものであった。このような全く新しい拠点形成が近世権力へと移行する一つの画期であると言える。^⑧

本稿はこれまでの研究史をまとめたに過ぎず、新たな成果を上げたとは言いがたい。しかし、本稿が槇島城、ひいては戦国期の宇治・槇島についての議論を活発にする一つの契機となれば幸いである。筆者自身としては、今後は槇島城・真木嶋氏だけではなく、宇治郷や細川氏権力との関係についても考察を深め、信長政権期の埒直政段階までふくめて総合的に検討してゆきたいと考えている。

【註】

- (1) 室町幕府で、将軍に直属して、守護大名を牽制し、将軍権力を支えた御家人。足利一門や守護大名家の庶流、有力国人領主等から成り、五番に編成されていた。
- (2) 宇治市歴史資料館編集、一九九七年。
- (3) 『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書』七一、宇治市教育委員会、二〇〇八年。
- (4) 林屋辰三郎・藤岡謙二郎編集、宇治市、一九七四年。
- (5) 前掲注(2)。

(6) 本文書は年欠であるが、林屋辰三郎・藤岡謙二郎編『宇治市史』近世の歴史と景観(一九七六年)、徳満悠「十五・六世紀における山城国宇治の都市構造とその変容」(『年報中世史研究』第四四号(中世史研究会、二〇一九年)などで天正二年(一五七四)発給と比定されており、本稿ではそれに従った。

(7) 槇島城がいつ廃城となったか定かではないが、槇島堤によって槇島城は命脈を断たれたものと思われる。(荒川弘「槇島城跡」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書概報』三九、宇治市教育委員会、一九九七年)

(8) 拙稿修士論文『戦国期播磨国における支配権力と拠点』(二〇二〇年)では、同じように秀吉が強制的に都市や地域社会を再編成して形成した城下町として、姫路城下の整備を取り上げている。

(宇治市源氏物語ミュージアム)